

「夕陽妄語^{せきようもうご} 2」 加藤周一



◆とても良い本なので前回に引きつづき、加藤周一さんの時評エッセイ夕陽妄語その2を案内します。

◆三匹の蛙が牛乳の容器の中に落ちた。悲観主義の蛙は、何をしてもどうせだめだからと考え何もせずに溺れ死んだ。楽観主義の蛙は、何もしなくても結局うまくゆくだろうと考えて、何もせずに溺れ死んだ。現実主義の蛙は、蛙にできることはもがくことだけだと考え、もがいているうちに、足もとにバターができたので、バターをよじ登り、一跳びして容器の外へ逃げた。世界の、また日本の、現状からの脱出は、倫理的・政治的・文化的必要だろう、と私は思う。私はこの比喩を好むのである。

◆「春秋二義戦ナシ」とは孟子の言葉である。日本国の十五年戦争、南京虐殺から従軍慰安婦、捕虜虐待から人体実験まで一を冒したことは、いうまでもない。そういうことのすべてが、いまからおよそ半世紀まえにおこった。いくさや犯罪を生み出したところの制度・社会構造・価値観—もしそれを文化とよぶとすれば、そういう面を認識し、分析し、批判し、それに反対するかしないかは、遠い過去の問題ではなく、当人がいつ生まれたかには係りのない、今日の問題である。直接の責任は、若い日本人にはない。しかし間接の責任は、どんな若い日本人も免れることはできない。かつていくさと犯罪を生み出した日本文化の一面と対決しない限り、またそうすることによって再びいくさと犯罪が生み出される危険を防ごうと努力しない限り。たとえば閉鎖的集団主義、権威への屈服、大勢順応主義、生ぬるい批判精神、人種・男女・少数意見などあらゆる種類の差別…。

◆日本国民には、みずからの生命財産の安全保障に関して、みずから税金を払って維持する政府と役人に、多くを期待しない習慣がある。また同時に共同体の成員相互の無償の扶助を当然とみなす価値観もある。政府ののろまさに激怒し、権利を強く主張するということがない。他方、無償の奉仕者、ボランティアに対しては限りなく依存する傾向もある。奉仕の義務を持つ役人と義務を持たないボランティアとを鋭く区別しない、ということであろう。

◆イエナの大学の数学の教授フレーゲの日記

今ではマス・メディアや疑似宗教やあらゆる種類の非合理主義によって操作されている。操作された感情は貧困化し、麻痺し、非人間化する。十分な予算が与えられれば、科学技術の研究は大きな知的満足をつくり出すのであり、その結果がいかなる人名の破壊手段であろうともそのことは無視される。感情の操作への抵抗、おそらく、理性と感情の分離ではなくて結合であり、それを可能にするのには、合理的思考の内面化と同時に人間の尊厳に対する感情の復権のほかにはないだろう。

◆神戸震災復興について、震災の三年後、仮設住宅の多くの人々は、日常的市民生活へ復帰する道を絶たれていた。行政は巨額の公費を投じて、神戸空港を作ろうと宣伝している最中。小田実は「これは人間の国か」を著した。仲間とともに「市民発議」による「市民＝議員立法」という企てを推進した。「大災害による被災者の生活基盤の回復と住宅の再建等を促進するための公的援助法案」が上程。市民の発議により、市民が準備した法案を、議員個人の参加を得て、議員立法として成立させるのは、その危機を打破するための、新しい一つの道である。

◆理性の復権、昔十六世紀末、ムガル帝国のインド皇帝アクバルは、多くの宗教（イスラム・ヒンドゥー・ジャイナ等）の平和共存を考え、人間の行動の善悪を判断する最高の基準を理性に置いた。「寛容」の精神は、あきらかにインドにあって西欧にはなく、イスラム世界にあってキリスト世界にはなかった。アクバルの精神を継ぐ、ガンディー、タゴール。そして未来はおそらく多文化共存、くりかえされる対話の世界になるだろう。

(案内：黒野晶大)